

自ら学ぶ教職員 活動報告書

グループ名 東濃地区感覚統合研究会

テーマ 感覚統合の観点を踏まえた支援とアセスメント技能を身につけ、個別の教育支援計画の立案・評価能力を高める

取組のポイント・成果

取組の内容とポイント

学校生活の中で、児童生徒の行動で問題とされるものには、授業中の離席、姿勢の乱れ、読み書きが苦手（板書を写せない等）、手先が不器用、情緒が不安定、乱暴等がある。こうした行動は、落ち着きがない子、だらしがない子、不真面目な子、雑な子等と評価され、“困った子”と見なされてしまうことが多い。しかし、困った子と言われる児童生徒は、感覚統合の観点から見ると、うまく感覚の処理ができなかったり、感覚の過敏さや鈍麻さがあったりして、本人としては“困っている”ことが多い。例えば、授業中の離席や姿勢の乱れは、自分の体の傾きや椅子の接地面を感じながら、自分の体をバランス良く保つことへの困難さからくることも考えられる。他にも、友達を叩いてしまう子は、力加減が難しいのかもしれないと考えることができる。こうした感覚統合の観点から“困っている子”の実際を理解し、正しく導くために感覚統合理論を学び、教育（遊び）に取り入れる具体的な方法を考え、児童生徒が楽しみながら自分の苦手さや困り感を克服していける支援のあり方について考えた。

また、アセスメント技能を身につけるために、オンライン研修会に参加し、個別の支援計画の立案・評価能力の向上を目指した。

◆感覚統合勉強会・事例検討会（場所：東濃特別支援学校）

- 6月12日（金）ZOOMによるオンライン研修会打合せ
- 8月7日（金）より毎月第2金曜日に感覚統合の知識を深める勉強会や事例検討会を実施した。

第1回は、新たなメンバーを迎え、感覚統合の基礎知識の確認をPowerPointを使用して実施した。

第2回は、昨年度メンバーより、前庭感覚、固有感覚、無意識の触覚など、理解しにくい内容について講義形式で実施した。初めて聞く用語も多いため、事例を出しながらわかりやすく説明した。

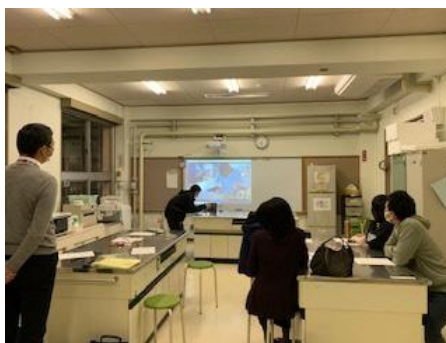


構成員による感覚統合勉強会の様子

参加したメンバーより、「今まで理解できなかった生徒の動きにも意味があったのかもしれないと思うようになった。」と、新しい発見があった。



▶第3回以降は、各自が事例を持ち寄り、事例検討会を実施した。



事例検討会の資料

◆アセスメント技能を高める研修

- ▶オンライン日本版Vineland-II 適応行動尺度研修セミナー（実施方法編） アスペ・エルデの会
日時： 6月14日（日）10：00～12：00 / 12月13日（日）10：00～12：00
- ▶オンライン日本版 Vineland-II 適応行動尺度（結果から個別支援計画を作る編） アスペ・エルデの会
日時： 12月26日（土）10：00～12：00
- ▶オンラインPNPS肯定的否定的養育行動尺度研修セミナー アスペ・エルデの会
日時： 8月30日（日）10：00～12：00

日本版Vineland-II 適応行動尺度を学ぶことで、児童生徒に“日常生活を送る上で必要なスキル”が身についているかどうかをアセスメントできる。検査は「適応行動」ができていないかどうかで判断するため、知能検査だけではわからない『生きる力』を確認し、今後の支援に役立てることができる。PNPSは、保護者の養育行動を振り返るために活用できる。必要な支援内容を明確にするための新しい技能を学ぶ良い機会となった。

◆高特合同感覚統合研究発表会

- ▶日時：令和3年1月 8日（金）高特合同感覚統合研究発表会（打ち合わせ）
1月20日（水）東濃F高等学校感覚統合研究発表会
21日（木）東濃特別支援学校感覚統合研究発表会
- 新型コロナウイルス感染症対策を考え、感覚統合について参考書籍をもとに資料を作成し、校内にて発表及び配布をした。



成果

- ・支援の実態を動画を活用して振り返ることで、支援者が効果的な関わり方ができているかを様々な視点で検討できた。もっと違う関わり方ができるのではないかと、教材の違う活用法があるのではないかと、一人では気づけない視点を交流できたことは大きな成果であった。また、紙面にまとめることで、日々の支援をPDCAサイクルで確認することができた。
- ・SlackやZOOM等のリモートツールを活用することで、コロナ渦でも学びを止めずに活動できた。
- ・アセスメントを学ぶことで、日々の支援が児童生徒の成長に繋がっているかを評価する術を学んだ。

反省・今後の課題

- ・感覚統合の理論の理解、共有が難しく、昨年は事例検討をするための基礎知識・理解を構築するまでに時間がかかったため、各自の実践を本研究会で検討するまで至らなかったが、今年度は、事例検討会を実施することができた。事例検討会を実施すると、様々な角度から児童生徒の発達について意見がでるため、日常的な支援の場でも実施していけると良いと改めて感じた。
- ・日本版Vineland-II 適応行動尺度は、今後WISCに並ぶ発達検査として重要になってくることを学んだ。今後、少人数コミュニケーション講座の受講者や支援を必要としている生徒に実施していきたい。